

教育の職業的意義 若者，学校，社会をつなぐ

本田由紀 著

我が国において終身雇用があたりまえであった時代では、若者は新卒採用というシステムのお陰で先進国の中では大切に扱われてきた。しかし、現在では、新卒者も正社員としての受け入れが難しくなり、既卒者はさらに厳しい状況に直面している。

このような時代の学校教育におけるキャリア教育や職業教育の在り方を探るために参考となる良書である。

著者は、「1990年代に、若者の仕事は大きく変貌し、非正規社員の増加、不安定な雇用、劣悪な賃金など…。なぜ、若年労働者ばかりが、過酷な就労環境に甘んじなければならないのか。それは、戦後日本において、『教育の職業的意義』が軽視され、学校で職業能力を形成する機会が失われてきたことと密接な関係がある」と指摘している。

その解明をめざし、教育学、社会学、運動論の視点から、各種のデータに基づいて、「適応」と「抵抗」の両面を備えた教育の職業的意義を明らかにして、教育という一隅から日本社会の再編をめざし取り組むと述べている。

本書は、序章「あらかじめの反論」、第1章「なぜ今『教育の職業的意義』が求められるのか」、第2章「見失われてきた『教育の職業的意義』」、第3章「国際的に見た日本の『教育の職業的意義』」、第4章「『教育の職業的意義』にとっての障害」、第5章「『教育の職業的意義』の構築に向けて」で構成されている。

序章「あらかじめの反論」では、著者がこれまでの講演や講座で述べてきた『教育の職業的

意義』の主張に対する反論を整理し、その定番の批判に対しての反論をまとめている。

反論の内容は、①「教育に職業的意義は不必要だ」、②「職業的意義のある教育は不可能だ」、③「職業的意義のある教育は不自然だ」、④「職業的意義のある教育は危険だ」、⑤「職業的意義のある教育は無効だ」について、反論が記されている。

第1章「なぜ今『教育の職業的意義』が求められるのか」では、1990年代半ば以降、日本の若年労働市場が大きく変貌してきた状況が多く報告をもとにまとめられている。

第2章「見失われてきた『教育の職業的意義』」では、高校・大学進学率の急上昇による学歴と職務との対応の崩壊に基づく教育と仕事の関係やその再編について述べている。

第3章「国際的に見た日本の『教育の職業的意義』の特異性」では、諸外国と対比して我が国の学校教育では、職業的意義がきわめて低い現状について具体的に解説している。

第4章「教育の職業的意義にとっての障害」では、「キャリア教育」の問題点を指摘し、「汎用的・基礎的能力」を植え付ける営みと批判し、より具体的な知識やスキルを確実に伝える教育が必要と主張している。

第5章「『教育の職業的意義』の構築に向けて」では、「戦後日本型循環モデル」の崩壊のもとでの教育の職業的意義は、特定の専門分野を切り口として、その後の発展や転換が可能であり、またすべての働く者にとって必要な労働に関する知識を教える必要性を強調している。

著者は、自ら先輩として「若者に対して社会が果たすべき責任」を明らかにし、このままでは「教育も仕事も若者たちにとって壮大な詐欺でしかない」と指摘し、その改善に向け行動していくと締めくくっている。

(ちくま新書、B6判224頁、¥740) (山下省蔵)